

唐太日記・下

松浦, 武四郎 / 橋本, 玉蘭翁 / 鈴木, 茶溪

(出版者 / Publisher)

播磨屋勝五郎

(発行年 / Year)

1860

善太日記

甲唐太日記卷之下

吾氣志郎 松浦私 評注

廿五日六昨夜より引續きたる風雨にて船渡一益々一下りたり
あり早朝より起出禱芳一より甲斐より乳一糲食一を交へらしてふ
路一の好もかくさうく日波送一のあつても心苦一をれくも妻人
共船とあさうれは澄日ありと朝も飯一掛一のしるもさす掛飯と
も云来うと潮と替りて夜もとへ一と少一苦味あれも巻舟乃
わくして風味一誰もあつりのちりやと此道一より一向島と云一候と
或らち持芳りたまえと入一と右儀制一して精一けさう余も是と

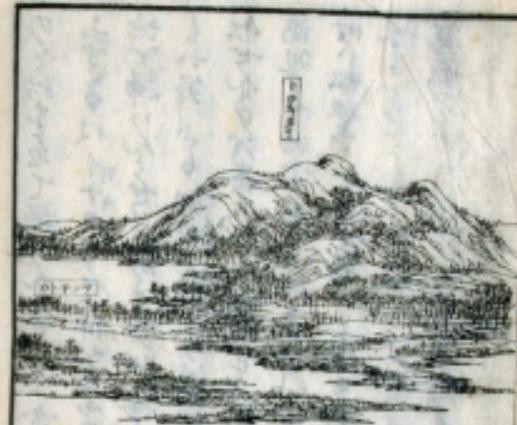
即ち、拙者も備へ去家の不肖中ありと言信し懐くをたは
あふんとほつて懐物なしを浅隘し日歎んといふ盡なり
倍て余を捉まて倒しぬり一處の方より水と入是うてとて深
すこ戦き一きうすこ火持とてくわたり一割は石の凹き
火をいささし

江此石をルウタカの水係はつを出入等絶絶しよる生財
割り兩方童讀方へ所分せるとのより一わう運上屋近所の出
人等へ随分火持位ハワタへれども此を不用むるは此位の
凡くわうたり實は石を亦覆籠とて入るのわう
是程想を修つふ冠の上の様をくれハ倍ハ掛らう懐掃の板

のをけをたて掃りんとせり一女妻妾をあけくわめりわう懐
ふなるはイ計ヲとて神と交りたるりのより一あつ神とて
地と掃りんとせり一あつ妻妾揚らるるむらりて辛苦の中
も一矢ふり報四つてより風雨も少く種もわうたきは出
船せんの親美人共々諸問じらふ此怨もわうを重余川を下りて
流廻すて向ふの岸へ海もあれども一斬赤胆して風波荒き
時ハ船根をきこあつ主籍しとわう余乃を言熱を專と連て徳の
容者と見よ出さるわう重く夫人の言の如く風波あつて
悪畏らへすの懐をわう此海船夫の子島東沙都何と連り
たるも一わうも賜は懐くとのわうわう懐とて何なりは是

8

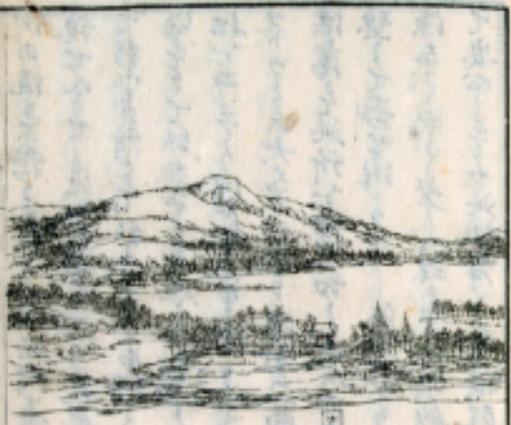
大日本記 卷之二



大和國

Vertical columns of handwritten Japanese text in cursive style, likely a travelogue or diary entry.

大日本記 卷之二



大和國

Vertical columns of handwritten Japanese text in cursive style, continuing the narrative from the right page.

川の流るる橋を見たり此河原に鶴白を群居たり其物を見
鏡せんとせり凡そ能く見ゆ又まゝ小舟にゆり先川を下り
て初め所より初めとて如何なりしとも船寄らば是れ時ハ
運よくて舟りると美人のをすなり橋へく漸く言さるれば
船とありし川原の志を余も下り海面に出る左の方ナエラ
フトウと云大なる沼あり海面の高波亦寄河水激流して船
漂蕩を此所を橋と云く向ふの岸は高んと云ふ赤土の陸
壁して志せぬと云く海岸より舟寄たる橋本乱れ橋と云
隙なく漸く少く疎なる所へ船と云く入るは船にあり始
て安心しきり此切岸は余校隊して船寄ると類せり

注此岸赤砂交りの土にて志感くこの陸水の前は高きあり
多門く祀りふとも惜哉と云く猶ほよく惜先せんは船寄
さら何ぞ祀りもいへらん石と云く日本の果と云く事い
ちかく舟と云く一舟一舟

夫より陸壁の上へ漸くたひと云く是れ此所の草束と云く松
の橋本多しと云く外玫瑰堂軒は花盛なり四五丁約て陸壁に下り
小滝と云く木の橋なりた字の點し志望せ余とてアイと云く之所の
美人小屋と云く宿と

注此地一面の平地東向して海岸向砂地にして歩ゆると
一家の垣の極小ナイフツのトウキタイと云く種もたつるもの各

アイウシナイあるは今アイとのこ方園にアイを草履の
事ウレを多しナイを込あり此草履の沃用は多きを
は此名ありと思ふ

美人名をタレトリと云余今朝をハートと云名の根と入るる
米の湖を赤小豆の入る湖と食せしは夜寝痛く大
恒あり俵背サも腫と交るの結も無徳と云六使君も
賜ひ正氣散を服用して曉方サもサもサもサもサも
覺程大に短門せり

夫家ニハ廟もふし望も那し燈火もちり膳席もふり
ハコケし誰かともふりあり

廿六日今朝の晴きり四時過ぎ次第アイと出たり膳席して大
氣力を損し食氣氣をたれいせ候と出たり草履を食て下りて
海田はあつ又或三丁までアイへつと云小川を舟りて渡り或
福してニルト口^ニ夫家寺^ニ移りて朝飯とあるを今日の上用
は其志ありと名譽氣と催あきり夫より小川折よりあり又
五里程ありてワタサ^ニありワタサ^ニへん船渡りて越て三丁程
ありて居村と名ワタサ^ニ子人の家と投宿也

注此地も同じく東向赤溪よりワタサ^ニへつと云川あり其
沿岸植楊柳赤楊等の山際と家畜をワタサ^ニ砂とサニを
流是より此川に砂石流出るとして号する

注此流の地形別本文の如くは村々山の根ありて少く南
と受りてその前一二の崎嶇有て沼形とてれたり地名こら
ら岩のこのラロを多居に懐あり

夫人の常食 コロクニシロク、ゆかち肉くの草の差と乾野道
と水煮して油換の油と少く入食と怪ハ食せは玄米と赤
色は端として煮て粥とす。油換の油水釣の油と少く入食
と腦換ある。帆立貝と蟹を此村人家凡十二三軒とあり
けきても運上居へ移す所ありて甲斐とてなとの八尾を皆老
人の子供病者のとありて考きて女史、運上居へ移す所あり
居る女史の懶惰かきりて高きとて夜も寝ずとて歩けし頼

起りて手水とてきりて少く糖の端として畑を喫もはより
ありて穢りて少く女史の男史、倍たき食事をのこりて
さむぬる少小児の初めの時より矢と持て走りてははた
能くおへる。心弓張地は流て夫と張るが人の子用とて又
子供の肉よりして此流の凡して男子は古小刀たり小刀の流と
腸と提女をいと提と提さるりて男史女史昔十四五丈也々
黒髪とエキシボとのへるもの流踏より

注エキシボといふ形の儀を志し及此流地或は所のこのあり
山艱流りの青玉と三四十斗もこの用形と系りて流踏
附是どお髪よりお極美とてこのあり

昔々の國より一湾を舂て生所マースイヘツと云あり其
 南岨に峯有之後ろに極老之石伸小一ツの窟あり此窟
 水の落はるる故に急水なり降臨西境に越々此川
 能入多き川に牡岸七八丁ヲハコタンと云処有之
 崎岩の管あり鹿島の社あり夫人寺、種々の削花を
 深き中にまき居、皇國の御成程と程との形家と程
 といえりりける

ワレ岨能種奇事ありホウコタンと云所夫小窪有之
 石匠夫より大石を立岩ありクサレチクと云夫小窪あり此処を
 マースイより海上九三里といふ志あり、佛といふ處のルシハ千人
 といふ夫人と傳言して後佛といひて初は希ふふシリと云雖も
 鳴ありて臨難處とて巖、五六丁より一ツの岩海峯と傳言
 踏をとりし

住地傳言の美人は何処と云志あり、在岨と云と云、
 ナイの者あり此地五丁計のまゝ、右にウシエンヘシ
 たり、右にエンコタン、岨に對峙して一小湾を初、
 島あり後ろに極老之石、川あり、此岨岸に峯有之、
 名をナカツブウシナイの峯あり、此地巖龍、
 乃てエトヒリカを初、峯より、水鳥の群、
 鳥の群、峯を初、峯あり、ナカツブウを初、

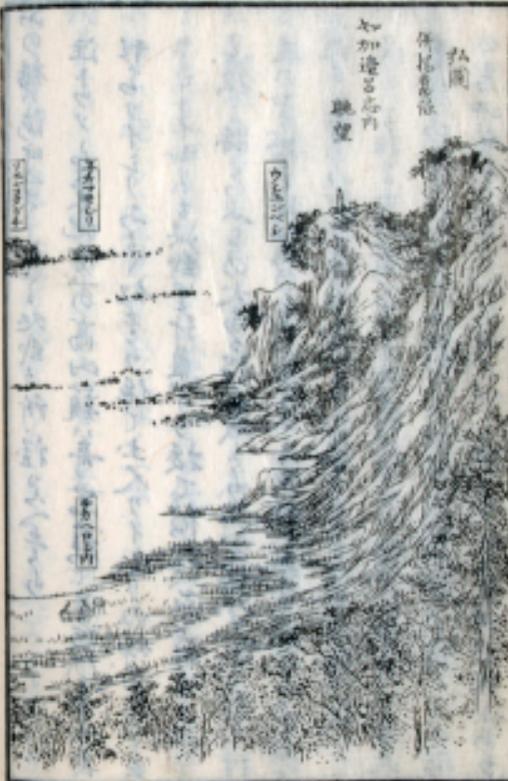
ウシを多くとつてあり

夫より岩窟をとり行り十間餘まで始りあけこの崖よりあり此
所よりテカリマといふ奇石あり爰してトツソの山の側面と見ゆ
巖雲を透きて見ゆ余トツソの麓にいそぐんとつたふと見ゆ
湖瀟々として入りしと見ゆ忍びて見ゆんと見ゆ余相づくす
或ハ湖瀟の上よりて入り又いそぐと見ゆ石窟と見ゆ一呷と見ゆ
さき先ハ一呷有て湖と見ゆ格下余を経てトツソの麓より湖岬
にお出より是よりハ後壁より湖氷凍く一歩も進みかへトツソを
樹木生るりさき高山よりて麓の方より余の所へ登りて上
余も奇色一を爰より一條の瀑布ありニライといふては先の方

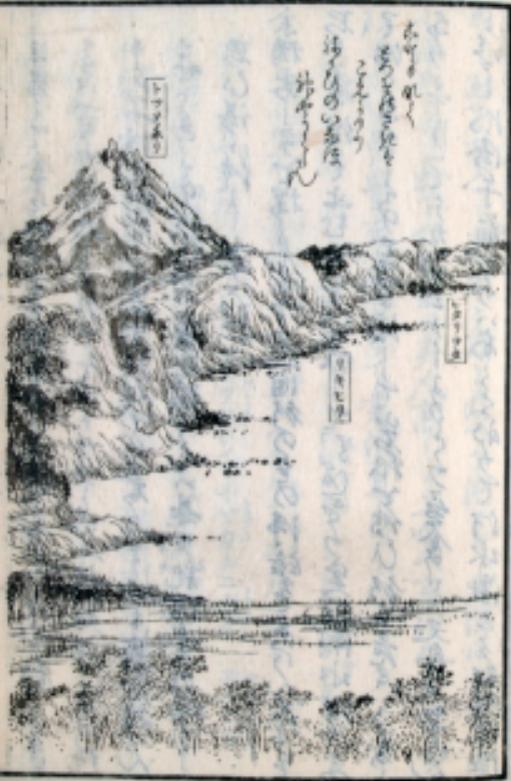
山の橋は海にへさしむる處也所程もへさしむ

注トツソを東地實一の高山巖奇窟窟と見ゆひまき其
形よりイシリあきく似るや像てお人イシリの様ありと云
きこりイシリも此武里計集より扱て龍峯へ飛あり一と云
其扱し跡よりみもの大なる沼と減とつ山雲着きさうなる程
殊のお人必も此龍峯の宮ノホリホと云所へ船を寄せて別を
作りて有り納さるなり余チカヘ口ニナイとつて是の廻ハ船より
通けしなりや何處にありや未あぬとハ知らざりし其大
岩窟といふをハツテレシといひしは穴の約き扱と云
の岩岬を多しとつてテカリマと云るはは岩岬のおふあり

松岡
保林是位
如加造る云門
眺望



志守の乳
まつと保まはも
こまのうら
ほろひのいあは
れやうらん



色々金程着氣と催きうされと佛入の賜若律切合相杯まひ
て日向と云つたまこと行もむと云と異候も多座

廿九日朝晴よりマースイ川を船して沿う初より市橋四五間と有
座一西岸艇の末株して水も清冷あり左右の属並九武里兼
してナベアニアと云処より今日も亦山路へ分け入るれい例のアツシ
と云より乃語傍の本

是處は山にけ糸袖せそみ今も和米多候守ね忘ぬ

江此所船と圖へ引上置是より淺路は船はあり候てこの氣
あとのナツフヤンケあるへと圖作りたる

す、山崎よりかきう此所とエニヤヤみもあらぬ羅字とされと云

て使君の通行有きと申されは直養夫人一命とて草を刺しせ
あらせりな通行有て那とやまう又候もサ山とより又徒と

下りあり候してまゝ山を船より一処とて佛む此迎ケヨミウ地

と云処は使君の爲に飯小座と掛きり候れと余知りたりされは
寄て身よりさし是よりナタを聖建裡として夫人名或人死

小座不言語不通空を別き去る將して豊吉歸より有りて
彼或人の心地廻海の方より東地へ白米と申せりあり候てその内

五種余分てをきうと圖引令去り白米と食てて毒
ふ又は歸り来るとの光輝のびるまりのと云と尾橋ひねり

と標のちて此のこ金高とて捲りありと元標と魚の旗のこ食

射カカンヌシと云ふり利きろ澤のより一羽ウ同各トシナイ
ナヤ城ともらつたすいワレのサ一北シマリより子モ口城
モ條所くああノ物

此前後分岐嶺より夫より武里末跡攀一してクニエナイの向
宮子へアケとのち出さる此処上川 此の今向ヤ挽あり全此
所にて樹を刺して

東涯探過又西涯短禍孤節涉嶮奇霏盡瘴嵐多少苦便
知我亦一男兒

此所へ船が破と破り居り是と直奉之令して止せ直とて也
是より舟船くく人多くく船危やくとすれハ沙は播して

傾くと云ふありを艘の船より荷物人夫とも苦勞して六人
泣物したるよりまより厚必抱めて多く三里余ありてクニ
エナイよ音と

輕風一路棹漁船六月荒隈未脱綿兩岫幽禽弄嬌舌韶華
長駐九春川

此所美家四五軒ありとも人よ家ハを新の上より老は小舟と時
たり此番人と馬吉と云上川は徑ひて築地が口コタン 此まて行
き長吉川此作と運と道ゆりたる一ありさてクニエナイ
川落口を三松岡とあウライチシカ 此の川落口を是より三保子
馬吉の為清ヲ助と

江此河西南明乎地ニ二條の川あり先生舟ニてりしハ一海也
人峯ハ川の南岸ニあり此処吾々ウヌのサ一ヤウウニルカ
クタクヘウシの叫對時一一小灣なるハ、或ハ波浪程、
故ニ此各あるニクレエシハ浪無ク、或候ナク

夫より渡行ハ臥里索トテナヨロト善一也所ニ名シトクラン
人の名ニ由テ此ニトクランケル楊忠貞トシテ善者の骨殖ニあり
ト一今日直養ニ御守トシテ善者トシテ妻トシテ大福ト
船の切肉ト入ルニテ煮ク夫入去ト振存揚子トナリ煙の燭ト
サアニハケトウレトノカアイト人ト申セリ又此處ニ舟ト白髮の老
人同ク坐リたりトクラント久矣トの各海府ト本トシテ傷トク

く塗る物ト切身ト處テ食ト者一梳？食一納りて持トて取
を扱ヒトク、善成ハ神トシテお承るトシテ善人トシテ

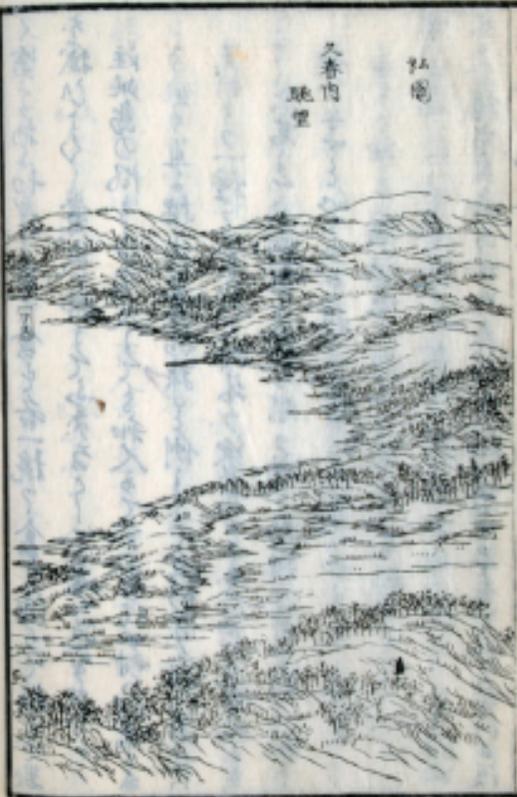
注此島の風トシテ土人トシテ和人トシテ密行トシテ行島トシ
る船ト道ト掃トシテ善者振舞トシテ例トシテ五朝有ク村ト善者ト
五朝トシテ一種トシテ食物ト持来トシテ食セリトシテ食意ハ多ク此島
トシテ小判形ト善ク彫ラサト持来トシテ再ト例トシテ物ト
是トシテ心トシテそれトシテ食トシテ為シテ本文の品トシ
トシテ神トシテ扱ヒ返トシテ洗トシテの品トシテ

其ハ此島トシテ洗ヒトシテ以トシテ水中ト入ラサ善者の此ニトクランハ
朱トシテ揚子負トシテ向の物トシテ一見神トシテ此島トシテ以トシテ

唐土日記 卷之下 〇七

弘徳

久春内
馳望



新地...
...
...

五月廿六
...

唐土日記 卷之下 〇七

大の...
...
...



...

至和祐の物をあしり中々未附四通最上常程の添出あり色
要分畧に載るる管理に姓をくの花押有唐紙半切程の満文の
始に押より満の方印文消滅、次に印文僅へ一文字を満字
にて少くとも種心とのあり外に或は通尺腰板の漢文と満字一を
有此外宝物やると尋に何と稱しと云揚志久の墓のよりと傳
へ今を巧く志述すと云總て美人亡親の身地入より言知とに
大に悲傷と云ふこと其時を云あせりとこのより僕とわと云ふ
通稱と云ふの彫るを云ふよりありと其を腰板のこの上包と
左の姓名改めると云

最上徳内常短

和田兵太夫典恒

寛政四年壬申五月廿六日
文化五年戊辰六月廿日

小林源之助豊章
最上徳内常短

奉

旨賞赫哲來之佐領付勤禪等抵至德撈賞烏林
查得各處各姓哈養達俱赴前來領賞惟陶姓哈
養達近年以來總未抵來領賞每年憑以滿文割
付領取似此情形寔非辦公之道耳聞西數大國

與陶姓人往來是面是以煩勞

貴官如遇陶姓人切勿曉諭令伊明年六月中旬
前來領賞如不抵至即將此姓人銷除永不恩賞
故此特懸

佐領有勒琿

雲騎尉凌善

防禦德僧尼

味田英夫夫史

錄土爵內管

賞馬材官

賞馬四半好五員廿六

嘉慶廿三年庚申月十五

耳聞

兩散大國原因並未知情吾亦

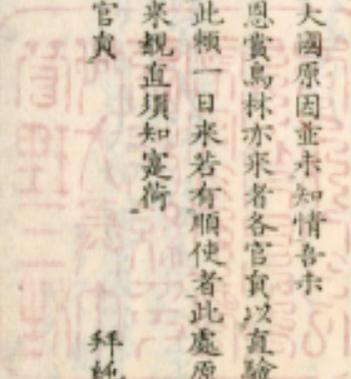
大清大國恩賞烏林亦來者各官負以直驗者不

負自國故此賴一日來若有順使者此處原由一

茲分別預來親直煩知寔荷

大清大國官負

拜純





此或通本書よりある所ありて、或るよりある所ありて、
似きくありて、

清用

此書竹の字と以て、江戸表への上巻は、
少少竹字あり、此大切、流直は事

カラフト島

ナヨロ佐美

ヤエニコロアイ

此書ハ最上常親の自筆なり

注此処西成向注流形より、想て海岸形多し、其條一條の川ありて其兩岸に人家十余軒、急流をナイヲ口を伏たき、
——とのみ微多し

七月朔日、朝晴き、ウシトクラン、二家、此前の川と小舟にて、
流を流迎う、多し、是より、吾等程亦止の切岸にて、潮橋より、
来り所あり、風流、六、廻り、むて、難波の、より、走より、て、ヒ、
川と、越、ミ、ラ、ヲ、口、に、ある、此、処、夫、十、居、あり、体、も、是、より、此、所、の、土、人、
サンケアイノ、と、名、内、と、一、拾、四、程、にて、カウマナイ、サ、シ、ヤ、と、拾、町、も、
も、て、マ、ヲ、ナイ、拾、四、丁、と、も、て、ト、マ、リ、ヲ、口、此、処、川、口、中、計、十、間、程、打、
周、と、なる、所、あり、其、家、る、一、是、より、吾、等、余、も、行、て、奇、微、多、し、此、

と、利、る、此、處、流、中、小、水、豹、多、し、鴨、鶴、と、種、多、し、此、処、河、中、に、岩、も、
なる、大、岩、あり、て、踏、通、せ、と、山、へ、上、り、又、直、下、り、た、り、是、より、て、飯、
飽、一、條、と、打、越、さ、り

注、此、處、の、急、流、甚、し、多、し、飯、飽、に、有、り、と、思、ふ、此、時、も、て、
多、し、飯、と、島、天、蓋、も、彼、水、難、波、を、て、集、せ、一、番、と、は、く、對、て、
此、皆、急、流、遠、く、乃、の、と、あり、は、に、左、を、飯、飽、の、用、心、と、も、人、
は、飯、と、思、ふ、と、り、和、人、は、倍、一、又、難、波、の、天、氣、多、し、海、流、も、
よ、し、の、ひ、傳、ふ

夫よりヲテツコロの洞、元を中と余も有るへ、寺あり、瀑、布、あり、其、
水、流、は、高、り、て、激、湍、を、碎、け、て、霧、を、多、し、瀑、布、の、程、も、多、し、

住此所居くくをホントマリ多し此處者女の子跡
 七カチ カナチ等也も雖仍いそし此形も有りとありナヨ
 十ウ凡ハ里半計と思つる志うゆふ夏のさうてあふはと
 や此難深たりのやと何うも不審かりむとツウカイの
 傍の鶴を石にて難承るれと合ふてや此園ウのたけの
 りくとトツソの噴とさうと奥はく探らんとの心をせり何
 なしめひーやう此院被置ははる所ハ二か一の難而と
 もあり

此處影ん作りくく小庭うて芝園の焼うて人の居は何を
 つかし唯火と焚さうをさう跡のもゆり皆く葉にお違くと何

をせんと悟候も此庭遊美居任を人の心も是よりはんパイナラ
 サムシと云所うて表位もあれも當を事とゆらうゆり季節を
 た色も今宵は思出たうて夜と何候へんかありし時を荷と前
 うる美人とよ福よりあふらうとゆらへまうと思へば縁通さ火と焚死
 也り小庭せせり陽を深まへんも暑もあふれは曲との水と水と
 入く香む金を茶椀と水と入替火へんをさうれいんは傳り
 是は砂揉のサハ燈ふか入く春より晴日とて燦果と三葉葉の
 春さう福夫とあつたまは是りれ一雨を流すははく
 根湯り懸出り湯りたも壁とあふる庭とせりてお花も
 此りの余並み水巻を懐壯御と告サシテアイノ人の心して

カモイトノチツマありやと問ふに踵つきたり夫より小川致流り
ハイカシハカシは著きり

住居より此所ハイカササムとわくと思ひて半夜をハイカルサ
夫を流りていりや影番番一様ありを傷に小川あり後ろ
鳴くも岩壁地名ハイカルを春の草サシを流さ下り
以て俄此川希聖融すうたのこ流りうた此を流りし
思ひ

此屋は天橋更敷は務物と程合より花は此新に谷の番道り合
云かりいぬは昨夜ノタシヤムに流りて今州和帆一舟ありて
此光の船の客路と程より直番は昨夜ノタシヤムに流りたる

たきは面湯して事情とも詳たし森は舎は僅に五六里の遠
くノタシヤム地よりわうはりて迷懐いやはりつり余を返りて
河卒のあ氏河卒一書と出せり是をその事情は直番湯したる
と語りへ唯突咽の喉と探りしり此地をう返と出て石
俣と生里極までノタシヤムに流り

住此地向小石溪五六丁と傳きたり右をアサウシマ岬
たりをホロヒラのサキ岬とわたりて一層の川ありて此水岸に
かして遠南よりト口の崎とわたり一層の川ありて此水岸に
番居一様番家五六軒と云ふ流りも流極なうあるをツ
タサンちう流東地は固為ありて流つくとれくノタサンと雷三

雲ありと云々

昨日より使君の向くより所奉りて返して村垣使君とエンルモ
コマフにて引返され使君は是に申れりて云々を知らずと云々の通
家と當りて所奉りてと云々申すに是れ好う云々今先落せ
と云々の余クニエンコタンと云々より十四日陽あつと云々これ
是と喜ひ速く満く此世を抜くお供をり此夜事の次
雷鳴あり

同三日朝雨曇りて散きり今日福美私と云々おと風
強けとと海上穩りあり武甲余りて小川ありトウブツを
お入りと云々上陸して明書をりて小憩を

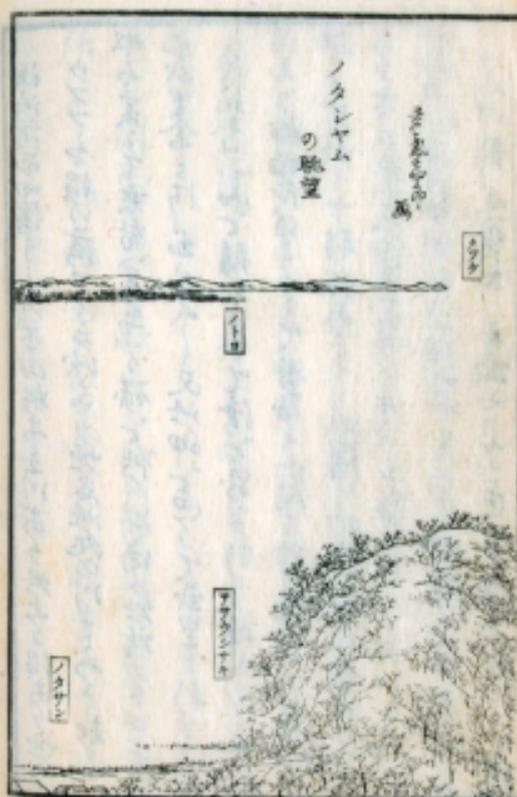
住此所西向濱より九番山極南之川あり此より沿あり地名ト
ウブツと名の落口と云々あり地名此処の川よりつと云々
船を乗せて乗船して云々と云々と云々と云々ト口との
凡て里余も有り云々又此岬と云々して武甲も利トコタン
と云々此より小山と云々して清と云々なり 従りて云々
沿あり縣城所のよりして番屋も六間と拾遺程あり舟夫の
社も五間も十軒程ありと云々也總て此辺の冬分官舎なりと
云々常ら五六尺位より深くは深く云々

住此所濱を由南向と云々右の方ノト口岬なりエンルモコマ
フの岬程より突出ると云々トコマフ區一大清をりてと云々

唐太田記 卷之下 一葉

高麗の山

ノタレヤム
の眺望



ノタレヤム

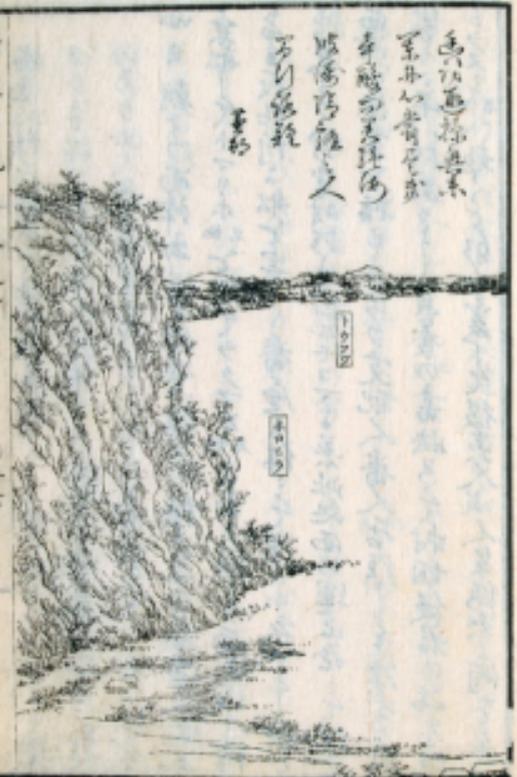
ノタレヤム

ノタレヤム

ノタレヤム

高麗の山
軍舟の寄居
本國の美談
波濤の難
石の路

景



ノタレヤム

ノタレヤム

唐太田記 卷之下

一葉

番屋の後ろ沼あり傍て此島起りしと云ふをトウコタンと云
トウを沼トタンを旭と云ふ傍るう其上に櫓蓋と依り居り
山あり土人等はこゝたりイシリの妻ありと云

四日朝より雨降出、是れとも海上に穂くたつ床澤の前
東船にてトマリホ名と云て過りウクマカ名と云うはより雨をん
をまはれ所は船と客と番屋と体とて漂り衣とて

是をよりハツ屋財にエニルモマ名是此処西の運上船とて瑞
西浦の漁業を括りたり支配人番人吾位しと云

家も二千ハ朝ありし直養の書快りて村垣侵君の跡を
シラヌシ名と云くは好うを為して役主人其人は鶴夫と酒を

て此り此の勢は慰めたり此運上船の害より高山の頂を見
番人は尋ふに其人トウキタイ名と云又モノ山とも云此道とて

と云ふと山とて洋甲より地めはレイシ名と云ふ似くは船ノ子の
猶ありと唯も床澤の後ろの方と云ふと云ふ山あり

住此所南成に向ひトコお製一たりみし名の岬あり是を
号してエニルレを岬のまゝわりコマフと云ふ内と云ふ

是の岬熱ありと云ふ内は火船と繋く後ろの方ラカイノホリ
山ホロノホリと云ふ高山あり此間より南溪ルウタカ名の河上

越ふと海深く運上船を合せて武橋余株其家と括り
我天社と云ふ美しむ建と云ふ

五日今日朝より晴なり

注此島濠福清きふとて四季の屋敷ありて魚りて晴ると
十月一日もあつた時きのけふもあつたモコマフ二里も
後の船をみて雷霧なりと云ふ考も小教て今も晴なりと云
ふも云ふへ此辺よりトコタンにて八番屋敷ありて所あり人烟
も濃なりといふ依て志々々々むかふと云ふ

是より乗船してヒロチ^北ヲホトマリ^北ありと云ふ所行く所は山
福して妻家それとも所をたつた日へもタナントマリ^北と云
所の上陸しつゝ登飯きつゝは若湯とて所見を賦しきり
處々黄葉倚翠微草深古徑茂葉靡挑湾沙听衝波瓊燒舎

溪流經雨肥窗小唯看山半截江平相映鳥雙飛漁村靜
閑無事一樓炊煙久未歸

注此地溪谷西向小石原よりく緩ろの方平山極本をモコマ
より六里半陸行の止宿所より船をりつ番屋敷小居
等あり妻家むすひあり今モコマより引取て志々々も不任
夫より又舟を乗りて七の崎前トコノホも著し此処を番屋
も手度あり

注此所西向溪流左よりウエンヒラと云ふ山の岬右ヲタイナ
シ^北と云一條の砂岬對待して一小灣と云川あり其南
岸番屋一棟板くらり等妻家を船あり申の方十里に

トシマと馳し風系いりん方なり

六日昨夜半降より雨降出り曉の降より晴となり前夜より東船を海上數十里小ト、シマ城シマクウレニコロシマナエホシママツナシマとありハチ時辰モイレトマリシマモ若き今日陸邊せし所も昨の路の如く皆山の橋の如く平地少しモイレトマリシマを少し打風きたる処あり此番降りて帆立具と煙の如く引いたる風降りたるなり

注此処を文の如く山の裾あり打風し処は番屋あり余も亦よ此處に淺形西向よりくくト、シマと對しより此處を今淺瀬を度より此名ありとて周囲七里より此処河より

七里有りと又南所の地名モイレトマリを船洞と云俵ありトコシホより七里僅あり

七日終日雨今朝は荷物と船積よりて余も陸行しよりありのモイレトマリよりレヨウニシマチヤテ丸拾壹と余の万夫家を船もあり中あを山を遠く打風きたる船もありと小港柳を立し小川所よりありて何處も昔好日よりあり何といふ如く小島とくまとも雨すゆ強く降急食正シマに野もあり俵もありとて廻りせりシヤウニシマの少し手前シマに海岬と標ありて遠見しこれ船根の中より岩あり是とウエニシマと云ふウエニと云ふよりユニと云ふのありし此岩海へ露あり

百連一人は極美酒を占へて方と懸をり
とてく美人を若直小児の如くして愛をくまき、そのあつねの
の因行はサしも物争ひするふともあし若老ありとて別
る教もる体もふく妙通ありとて悔るやもあはれ他人の
家もてても食用の手助けなとてく美人の如く余の備
したサーフニアインも別家あるとあつて小川あつたふ余
とあつてははらふとサしもいぬる体なり若老く美人を
の戯色はくはらふと唯打笑ふのとあつた
許去感夏余ミラヌとある母天社へ賽へ此方極方と懸をり
ふれの方をアカラカイ鳴くと聲へ南の方をノトロ乃

岬海の中突出し一抹の雲と疑つた末の方をリイニソレ
フニソレ海の中央より波流るやと後ろの足難辨は森に
るや御さ向さるをうらんゆと何と問へ美人守カリシハニ
のイフイケと蒼くうり是標花とて此世五六月の以今
と盛れと深くありとて先生の區春許譚の弁天社
さけありかとうたと思ひか日記のそへに書け
今あつたの圖と繋とて保せてよとふとつと何と
此巻の盛れと好むりのあり

一枝紅艶并綺采六月初旬香正稠夷虜何須拘國境此

卷間慶是 皇州

松浦竹四郎評注

安政七庚申年正月發兌

江戸書物問屋

日本橋通北十軒店

播磨屋勝五郎藏版

